



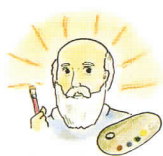
## Gallery Talk

誌上 ギャラリートーク

01

会期：2008年4月4日(金)～5月18日(日)

オックスフォード大学・アシュモリアン美術館蔵



### 印象派の巨匠ピサロ — 家族と仲間たち — 展



カミーユ・ピサロ《窓からの眺め、エラニー＝シュル＝エプト》1888年  
Photo © Ashmolean Museum, University of Oxford

1855年、フランス・パリ、多くの人で賑わう第1回パリ万博会場を一人の若者が訪れます。会場ではアングルとドラクロワの絵の前に人だかりが出来ますが、カリブ海セント・トーマス島から来たその若者はコローの風景画に心を奪われます。また万博会場のすぐ前の通りでは、アカデミズムに抗議したクールベが「写実主義＝REALISME」と銘打った世界初の個展を開いており、この若者はクールベのレアリズムにも惹かれます。

若者の名はカミーユ・ピサロ（1830-1903）。美術の世界が大きく様変わりする転換期、印象派風景画家ピサロの胎動の瞬間です。この後、ピサロは、自由な気風の画塾、アカデミー・シュイスに通い、そこでモネやセザンヌと出会います。後に印象派と呼ばれる画家仲間のうちで最年長だったピサロは、その温厚な性格から誰からも慕われ頼られる父親的な存在でした。

ピサロは近代化から取り残されたようなポントワーズの田園風景を描き続けますが、後年スーラ、シニャックと出会い、新印象主義の点描技法を取り入れます。ここで紹介する絵はその頃、ピサロ58歳の作品、点描技法を厳密に採用した珍しい一枚ですが、視力の衰えの中で2年をかけて丁寧に描かれ、ピサロらしさを貫いた渾身の一枚です。

全ての人が農民のように平和に落ち着いて暮らす社会を理想とし、感傷性に浸らず、力強く田舎の自然を描いた「大地の画家」ピサロ。その人間味溢れる絵画を、ゆったりとお楽しみ下さい。[池田幸子]

02

展示室で音を解禁する。すると「作品の楽しみ方」「美術館の楽しみ方」は広がりを見せるのではないかと。これが今回の展覧会のコンセプトです。展示室では、「視覚に訴える作品」として当館所蔵作品が展示され、一方でゲスト・アーティストによる「聴覚に訴える作品」が展示されます。

出品をお願いしているのは、藤本由紀夫氏、金沢健一氏ら。藤本氏はオルゴールや電子キーボードを用いて、空間に「控えめ」な素振りで「音」をプラスすることで、その空間の「見え方」「雰囲気」にゆるやかな、しかし鮮やかな変容をもたらします。また金沢氏はばちで叩くと澄んだきれいな音を奏でる鉄の彫刻作品《音のかげら》、そして鉄板上に砂をまき、ばちで鉄板をこすると深みのある音とともに砂粒が美しい幾何学模様を描く《振動態》など、音と形が密接に結びついた美しく神秘的な彫刻作品で知られます。

高松市美術館コレクションと「音」の作品のコラボレーションは、どのような「視覚」と「聴覚」の場を生み出すのでしょうか。開館20周年を迎える今年の夏、あなたの目と耳（あるいはその他の器官）を使って、体感してください。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

会期：2008年7月25日(金)～9月7日(日)

開館20周年記念

### コレクション<sup>プラス</sup> ひびきあう音・色・形



金沢健一《音のかげら10》2004年  
(川越市立美術館での展示 2007年 撮影＝多羅尾牧洋)





巨匠ブルデル展にて



コレクション展1にて



|      |            |   |                                                          |
|------|------------|---|----------------------------------------------------------|
| 2007 | 9/21～11/4  | A | 「巨匠ブルデル展」ギャラリートーク（開催回数のべ20回、参加者数のべ240名）                  |
|      | 10/20      | B | まるごと探偵クラブ「ブルデルのひみつを探せ！」アシスタント                            |
|      | 10/28      |   | 子どものアトリエ vol.14「ねんどで動物をつくろう！」（講師：彫刻家・さとうゆうじ氏）アシスタント      |
|      | 11/23～12/9 | C | 「高松市美術館コレクション展Ⅰ 立体をめぐる4つの部屋」ギャラリートーク（開催回数のべ8回、参加者数のべ69名） |
| 2008 | 12/1       | D | 「高松市美術館コレクション展Ⅰ」アートで遊ぼう！「カルタ de アート」アシスタント               |
|      | 1/11～27    | E | 「高松市美術館コレクション展Ⅱ めくるめく連作版画の世界」ギャラリートーク（開催回数のべ8回、参加者のべ87名） |
|      | 1/13       | F | 子どものアトリエ vol.15「ぼくわたしの手のアルバムをつくろう！」（講師：造形作家・赤松きよ氏）アシスタント |
|      | 1/27       | G | 子どものアトリエ vol.16「ボラロイドデトラレヨウ」（講師：映像作家 VJ・得丸成人氏）アシスタント     |
|      | 2/3        | H | 子どものアトリエ vol.17「写真を使って鉛筆画を描こう」（講師：画家・安富洋貴氏）アシスタント        |
|      | 2/22～3/23  |   | 「人間国宝 苅部 太田偏展」ギャラリートーク（開催回数のべ6回、参加者のべ117名）               |
|      | 3/2        |   | ワークショップ「目と頭／感覚と世界を繋ぎ換える『芸術の設計』」（講師：造形作家・岡崎乾二郎氏）アシスタント    |
|      | 3/11       |   | 国分寺老人福祉センターにて市政出前トーク「アートで遊ぼう！」アシスタント                     |
|      | 3/15       |   | 子どものアトリエ vol.18「色を編んで遊ぼう！」（講師：漆芸家・高橋香葉氏）アシスタント           |
|      | 3/23       |   | ワークショップ「みんなの記憶を紡いでつくる 時の糸」（講師：造形作家・平野薫氏）アシスタント           |

※ギャラリートークは各展覧会会期中の日曜・祝日、各午前・午後で開催

「まるごと探偵クラブ」とは、小学生を対象にした鑑賞教育の推進を目的としたイベントです。今回は「ブルデルのひみつを探せ」というタイトルで、子供の目線からすると「色も動きも無い」退屈になりがちな彫刻作品ですが、クイズを解く事を楽しみながら作品に隠された意味やエピソードを調査・探究するコーナーや、ゲーム感覚での制作をおして、作者の心情に迫るコーナーなど巨匠の芸術作品を多角的に鑑賞するプログラムでした。子供たちは皆、「探偵心」を発揮して積極的に作品と向き合いました。作品の裏側に回り、細部にわたって観察する子、ギリシャ神話を確認しながら作品巡りする子など、多様な楽しみ方で過ごしました。今回で4回目の「まるごと」。今まで参加した子供たちが鑑賞の喜びを覚え、次世代の美術館利用者になってくれる事を願っています。

**B** 10/20 まるごと探偵クラブ  
ブルデルのひみつを探せ！  
アシスタント

「おおつ、なんだかもの凄い迫力！」ブルデルの傑作《弓をひくヘラクレス》を初めて見た時、完成された作品のパワーに圧倒されました。周りにはこの作品のデッサンや習作の数々が展示され、パランスや角度・表情等を幾度も試行錯誤して完成された作品には時代を超えて人々に感動を与えるのだ、と実感。作品の後ろ側に鑑賞のポイントがあったり、細部に新たな発見があったり、平面で見る絵画とは違いぐらりと360度鑑賞することが出来る彫刻ならではの楽しさを味わえる展覧会でした。

**A** 9/21～11/4「巨匠ブルデル展」ギャラリートーク

今回は、立体作品。まず作品の写真的な一部分だけを切り取ったものをヒントに、展示会場でその本体を見つけて出す作業。各々断片写真を手し、あっちウロウロこっちキョロキョロ、「実物と写真」「全体と部分」という二つの見え方の差に邪魔され、切り取られた一部分だけで作品を見つけるのは意外に難しく、「あった！」の音が嬉しそうでした。次に、その作品の全体写真をカルタの絵札とし、読み札の文を各自考え、その文を聞いて皆で作品の当てっこ遊び。作品の特徴を上手く捉え、易し過ぎない微妙なヒントを短い文に巧みに入れ込む技はなかなかのもので、子どもたちの観察力の鋭さに感心しました。同じゲームを今度は是非civiで。老化防止に…「池田幸子」

**D** 12/1 高松市美術館コレクション展Ⅰアートで遊ぼう！「カルタ de アート」アシスタント

「コレクション展」というと、「高松市美術館の収蔵品だから、常設展と変わらない」、又は「いつでも見ることが出来る」と、思っている方も多いのではないのでしょうか？でも、年に1～2回開かれるコレクション展は、常設展よりかはるかに規模も大きく、見応えのあるものです。また、今回出展された伊藤公象《木の肉、土の刃》のように、10年近くciviにいる私達でも初めて見た！という、貴重な作品が展示されることがあります。高松市美術館コレクションの作品の良さを見直すことのできた展覧会だったと思います。「石床亜希」

ています。「大澤宏敏」

**C** 11/23～12/9「高松市美術館コレクション展Ⅰ 立体をめぐる4つの部屋」ギャラリートーク



## 高松市美術館コレクション



谷澤不二松《草花文 彫漆香盆》1933年  
漆 46.5×46.2×4.2cm  
高松市美術館蔵

玉楮象谷が端緒を拓いた伝統ある讃岐漆芸。その名品を数多く所蔵する高松市美術館にも谷澤不二松の作品は少ない。わずかな数点である。が、その作品の冴えは何度見ても私の目を釘付けにして、漆自体の奥ゆかしく凛とした美しさと、その漆を媒介として自然の美しさを改めてしみじみと感じさせてくれる。

不二松は磯井如真が最も期待を掛けていた逸材だった。弟子への図案の指導では、「全部消せ」と言って自ら図を付け直すことが多かった如真も、不二松の図案だけは決して手を出して直すことはなかった。「あの男は直さんでもよい。云ってやればちゃんと直して持ってくる。あれは力になる男だ」とよく言っていたという。自分の助手に不二松を望み、熱心に頼み込んで助手にもしている。不二松は愉快な面白い青年であつたという。戦争はこの漆の天才、讃岐の宝を情け容赦なく奪い去ってしまった。三十六歳であつた。

私がなぜ殊更に谷澤不二松に惹きつけられるか。それは、工芸品にあり勝ちな「自分の技を見せてやろう」という傲慢さが微塵もないからではないかと思う。見ていて気持ちがいい。不二松は漆が好きで好きでたまらなかつたに違いない。これほどの天才的なデザインと技術で以て制作された作品が私達の目に訴えてくるものは、制作者の技量などではなく、唯々自然が生んだ漆の美しさなのである。「無心につくれるものの中に『他力』によって『美』が授けられる」とは、柳宗悦の言である。

本作品は、木製素地に赤味がかったうるみ色の漆を塗り重ね、その上に黒漆を百二、三十回ほど厚く塗り重ねた堆黒の香盆で、桔梗と芽の葉を彫り出している。不二松が戦前弱冠三十三歳で新文展において特選を受賞、今は行方わからない《そら豆と三味線草 彫漆箱》がひょこり見つかった、高松市美術館の所蔵となる日が来ることを祈っている。「合田笑子」

・参考文献：住谷晃一郎『讃岐漆芸』河出書房新社



# E 1/11/27 「高松市美術館コレクション展Ⅱめぐるめくく連作版画の世界」ギャラリートーク

「めぐるめくく連作版画の世界」と題された今回のコレクション展は、本当に素晴らしいものでした。一步会場に足を踏み入れた途端、ウォールホルの色とりどりマリリンモンローがずらっと出てきてくれ「おっ！」という声思わず出てしまいました。ジャスパー・ジョーンズ、リキテンシュタイン、カンデンスキーそしてジョアン・ミロ：なんと賛沢な展覧会でしょう。そして今回の一番の見所は、何と言ってもマチスの「ジャズ」です！大病を患い大きな手術を2回もしたマチスが、油絵に代わるものとして生み出した切り絵によって原画がつくられたこの作品は、さすがマチス！とうならせる傑作でした。今まで余り見る機会なかったこれらの作品を堪能出来てとても幸せでした。「植松紀子」

# F 1/13 子どものアトリエ 15 「ぼくわたしの手のアルバムをつくらう！」講師：造形作家・赤松きよ氏 アシスタント

今回のワークショップは、自分の手の石膏像を作るものでした。先生は子供たちにとってまさに「お姉さん」。先生がまず粉末の型取り剤を水に溶かして、こねていくところから子どもたちの目は先生に釘付け。興味津々で作業を見守ります。ホットケーキのタネのような型取り剤を容器に流し込み、手を入れてジッとガマンの子は5分ほどでプリンのように固まりました。手を抜いて、今度は石膏をその穴に流し入れます。石膏が固まるま

で約30分。その間、先生と子どもたちは一緒にゲームで楽しみました。石膏が固まり、容器と型取り剤をはがし取って現れた、自分の「手」にみんなびつくり大喜び！それぞれ好きな色を塗ったら、白い石膏像がたちまちカラフルなアート作品に変身。子どもたちの小さな手のアルバム（写真集）ができました。彼らが大人になってこの作品を見たとき、今日を思い出してほしいなあと、すっかり大人の私は願いました。「堀本真弓」



G ロボット戦士？！

# G 1/27 子どものアトリエ 16 「ボラロイドトラレヨウ」講師：映像作家 VJ・得丸成人氏 アシスタント

映像作家の得丸さんを講師にお迎えして、子供達にとつての夢の姿や形に「変身しよう」という内容。最初にまず、変身のイメージを画用紙に描き、用意された材料、布や針金、ダンボール、毛糸、などを使って実際に形に作り上げました。子供達の変身願望は実に多彩でさまざまな形が生まれました、小学生の女の子は、蝶のような仮面とマントをつけて、正義の騎士に変身。その弟は大好きな魚や亀を画用紙一面に描き、丁寧に色を塗って、それを頭に巻きつけ「歩く水族館」に。また、別の男の子は、戦うロボット戦士になろうとして、身に着ける鋼鉄の防具作りに工夫を凝らしていました

たが、時間切れで、頭と片手の部分と剣ができただけでしたが、それでも十分に戦士の気分が戦っていました。また、節分前だったので、ある女の子は、鬼の角を一本だけ丁寧に作り上げ、すっかり鬼に変身していました。子供達それぞれがすばらしい空想の世界を楽しんでいました。「石原ミエ子」

# H 2/3 子どものアトリエ 17 「写真を使って鉛筆画を描こう」講師：画家・安富洋真氏 アシスタント

この日の先生は優しい「お兄さん」。先生が普段描いている作品は、本物よりリアルな鉛筆画。今回は、みんなも鉛筆画に挑戦。まず自分の好きな写真を白黒でコピー。コピーの裏を鉛筆で黒く塗りつぶし、白い紙に重ねて上からなぞります。白い紙に、うすらと黒の濃淡の絵が写し取られ、その絵に光と影、質感などを鉛筆で描いていきます。なんとハイレベルな制作！みな苦戦していました。それぞれ自分らしく表現していました。写真を忠実に再現していた子、自分の姿の部分を切り抜いた子、小犬のツヤツヤした毛並みを一生懸命描いた子など。最後にみんなの作品を並べて先生が一つ一つ丁寧に講評してくださいました。感激しました。色を使わず鉛筆一本で描き表現する、興味深い時間でした。「堀本真弓」



# DOCUMENTS

## まるごと探偵クラブ 「ブルデルのひみつを探せ！」

「巨匠ブルデル展」関連企画「まるごと探偵クラブ。ブルデルのひみつを探せ！」が、2007年10月20日（土）開催されました。「まるごと」とは、子供たちに展覧会の理解を深めてもらえるよう、そして何より、美術館で楽しい時間を過ごしてもらえよう、クイズや制作ワークショップなど多彩なプログラムを実施するイベントで、今回で4回目を迎えます。

内容を簡単に紹介しましょう。まずは開会式の出し物「ライヴ・弓をひくへラクレス」（写真a）の上演。これは、ブルデルの代表作《弓をひくへラクレス》のポーズを人間がマネし、本当に弓を放つと言うもの。参加者は唖然とした表情で眺めていました。引き続き、パワーポイントによる電子紙芝居「ブルデル物語」の上演。ブルデルの生涯をお勉強してもらおうというわけ。ここからは参加者は学年ごと少人数グループに別れ、複数のプログラムのうち3つをツアー形式で体験してもらいました。「彫刻っておもしろい。発見！ブルデルの魅力」（写真b）は参加者全員が体験するプログラム。ワークシートに記されたクイズとクロスワード・パズルを解きながらブルデルの「人と作品」への理解を深めるというもの。シートは小学低学年用、中学年用、高学年用の3種類を用意。「ブルデル、どこに飾る？私のブルデル空間」（写真c）は、「ブルデル作品を飾るとしたら、どこに、どんなシチュエーションで」という課題を、様々な風景写真にブルデル作品の写真をコラージュする手法で実践するもの。「ぼくの、わたしのペーター・ヴェンを作ろう！」（写真d）では、紙粘土を使って、ブルデルが熱中したペーター・ヴェン像の制作に挑戦。「手と眼の間にあるものをつなごう！」（写真e）は、視覚障害者のTさんがブルデル作品を「手」で鑑賞し、参加した小中学生は「目」で鑑賞し、たがいに感想を述べ合うというもの。ちなみに、ブルデル展では視覚障害者の方むけの「手による鑑賞」が実施され、多くの方に来場していただきました。そのほかお楽しみコーナーとして、輪郭線だけで示したブルデル作品のイメージに好きなように塗り絵をしてもらう「ぬりえ de ブルデル」、そして、想像力たくましくブルデル作品が発する声聞きとり、壁に貼ってあるブルデル作品の写真に吹き出しをつける「ふきだし de ブルデル」も実施されました。

「まるごと」は同時多発的に様々なプログラムが実施されますので、たくさんスタッフを必要とします。今回も美術館職員他、ボランティア・シヴィルのみなさん、大学生・高校生・中学生のみなさん、学校の先生方、総勢32名がスタッフとして参加し、2時間ばかりのイベントのために、数回にわたる会合への参加、ワークシートなど小道具の作成など、手間隙かけてくださり、おかげで「まるごと」は無事盛況のうちに終わることができました（写真f）。手弁当で集まってくれたスタッフの皆さんにはホント感謝です。そして、参加してくれた小中学生の皆さんには、いっか何かの拍子に、「講堂で半裸のお兄さんが変なパフォーマンスをしたなあ」とか「クロスワードパズル難しかったなあ」とか思い出してくれたら、これ以上うれしいことはありません。「高松市美術館学芸員 牧野裕二」







## まだこれから a b

一番思い出の深いギャラリートーク？…う～ん、私が担当した47展を振り返りましたが、思い出だけで…初めてのトークで足がガクガク震えた「ハーバード大学コレクション展」(1999)、画家たちの夢のような饗宴に思いをはせて、何とかあの熱を伝えたいと必死だった「バリのカフェと画家たち展」(1999)、報道写真だけに心をゆさぶるような慟哭(どうく)を誘う内容にも拘わらず芸術性の高さに感動し、残酷さよりも美しさを伝えたいと思った「ロバート・キャバ賞展」(2000)、トークと共に太鼓のリズムが欲しいと思った「知られざる西アフリカの美術展」(2002)、GT参加者と作品が同化して「人の森」に佇んでいる様な錯覚を覚えた「舟越桂展」(2003)、一番のGTは…多分まだこれからです。[池田幸子]

## ハーバード大学コレクション展

civi 発足10年、その間ギャラリートーク対象特別展は48展あったそうです。そのうち私がGT担当した展覧会はいくつあったんでしょう？でも、何回トークを経験しても一番思い出深い展覧会は月並みですが、やはり初めての「ハーバード大学コレクション展」(1999)です。その時は何回もハーサルをしても緊張と不安が拭い去れず、当日は明け方まで原稿と向かい合っていました。でも実際GTをしてみると、始めこそ緊張したもののお客様の興味深げに作品に見入る楽しそうな顔を見ているうちに緊張も解け、いつしか一緒に鑑賞を楽しんでいました。トーク終了後は「無事に終わった」という安心感、そして「自分なりに精一杯やった」とわずかですが満足感がありました。今でもトーク前には緊張も不安もありますが、どん

な人達がどんな反応をして下さるのか、という楽しみが加わったのは、私の成長の証でしょうか？[石床亜希]

## ヘンリー・ムーア展 c

はじめてギャラリートークというものをしたのは、忘れもしない「ヘンリー・ムーア展」(2003)です。もうかれこれ5年になります。美術のことを何も知らないから少し勉強させてもらおうと応募したciviに運よく入れていただいたものの半年間の研修後のこのGTです。「さあ！次は貴方たちの番よ」と、厚い図録や数々の資料をもらい読んではみても長年の不勉強のせいですぐに眠くなるし、訳が解らないし原稿をまとめるまでにすく時間がかかりました。いざ当日、人前で話すことなどなかったので、手も足も声も震えましたが何とか終わることが出来、ほっ！としたことを今でも思い出します。ヘンリー・ムーア展の後、箱根彫刻の森美術館を訪れ自然の中に置かれた彼の彫刻を見たとき「あー大変だったけれど、この作品をより深くこのように感慨を持って見られる様になったのはあの苦しかった勉強のおかげなのだ」とつくづく思いました。[植松紀子]

## エミール・ガレとドーム兄弟展 d

まさか懐中電灯を持って美術館に出動するとは！「エミール・ガレとドーム兄弟展」(2006)では、ガラス作品の美しさを皆さんにより深く鑑賞していただくため、作品に懐中電灯のライトを当て光を通したガラスの色の変化を見ていただきました。通常展示でも美しさに感動する作品ばかりですが反射光と透過光で色が変わったり、貝殻が浮かび上がり海の底を

見ているような癒された気分になったり、お客様の「うわぁ～キレイ！」という声が耳に心地よい展覧会でした。[木村真由美]

## アンテスとカチーナ人形展

印象に残るシヴィ活動…私は、アメリカインディアン・ホビ族の雨乞い人形を紹介する「アンテスとカチーナ人形展」(2004)でのワークショップです。なぜなら不肖な私が「講師」よろしく子ども達を導き、巨大カチーナを3体も完成させた訳ですから。勿論、成功の陰には他のシヴィメンバーの多大な協力と連携が一番の要因なのですが、企画の不安、当日の緊張、フィナーレの感動は、4年経った今も忘れる事ができません。子ども達、シヴィのみんな、アリガトー！当然ながら？展示期間中、香川県の降雨量は相当なもので、イベント当日も台風接近につき、やはり雨！全てカチーナのご加護です。[大澤宏敏]

## イサム・ノグチ展

「イサム・ノグチ展」(2006)は衝撃的でした。彫刻の展覧会を見るのも初めてなら、抽象彫刻なんて言葉も知らなかった。ギャラリートークの原稿には苦労しました。資料を読んでも理解できなくて。結局当日の朝の4時までかかって書きましたっけ…。そしてトーク中は作品の存在感に圧倒されつつも、イサム氏のエネルギーに部屋全体が包まれているように感じました。もしやイサム氏が「いた」のかも。あの不思議な感覚は、今でも覚えています。[堀本真弓]

## Information

### ご案内

私たちと鑑賞を一緒にしませんか？

美術館ボランティア「civi (シヴィ)」による  
ギャラリートークは特別  
展覧会中の毎日曜日お  
よび祝日の午前11時～  
午後2時～1日2回、  
2階展示室にて行います。

作品や作家などの知られざるエピソードが聞けるかも？

## Editors' note

### 編集後記

- 1999年1月に産声を上げてから早や10年目、civiがギャラリートークを担当した展覧会は「ピサロ展」で48回目になります。コレクション展では繰り返し展示されるお馴染みの作品も多いけれど、馴染みの心地良さよりも、新鮮な驚きの方が大きく、何度観てもワクワクします。奥が深いなあ…[池田幸子]
- 久しぶりにGT担当をした展示会がコレクション展。そしてタイムリーにcivi発足10年目始めにこのしびのひとりの担当。今年は何か記念と過去がキーワード？という感じ。未来に向けても良い年でありますように！[石床亜希]
- 近頃、原始的な人間のエネルギーを感じるという「アウトサイダーアート」(既存の美術教育を受けない人達の芸術)が注目されているようです。子供のアトリエで、子供達と触れ合うとき同じような力を感じます、子供達は巧みすぎて芸術家ではないでしょうか？[石原ミエ子]
- 高松市美術館には、本当に素晴らしいコレクションが色々あるんですね。今まで見ていない人たちに、もっととどろんと観に来て欲しいと心から思います。[植松紀子]
- 過日、とあるワークショップに初めて参加しました。時間と我(大人である事?)を忘れ、無心になって制作に没頭…。「工作」ってホント、いいものですね。[大澤宏敏]
- ムンク展を見てきました。一人の作家の作品の数々を見ていると作家の人生が見えてくるような気持ちになります。自分の作品を後世に残し人々に感動を与えることができる。芸術家ってステキだなあ…。[木村真由美]
- 感動する心を持ち続けることは意外に難しい。心偏に忙いを書いて「忙」。どんなに忙しくても心を亡くさないよう心掛けたいものです。[合田笑子]
- ワークショップの魅力に参ってマス。プロの指導。みんなで制作。楽しいですヨ～～～[堀本真弓]
- 美術館は今年で開館20周年。開館記念日8月6日前後に開催される記念展を、担当者である私は「成人式」のようなものと考えています。コレクションはこの20年間にじゅうぶん「一人前」といえる充実した内容に成長しましたが、私の学芸員としてのスキルはまだまだ「半人前」。はやく学芸員としての「成人」を迎えることが出来るよう、精進したいと決意を新たに次第でございます。ところで、シヴィも活動10年目に入突。これからも飛躍を続けるシヴィとしびのひとにご期待ください！[高松市美術館学芸員 牧野裕二]